

日本の刑務所におけるコミュニケーション・ギャップ

講演者：坂本敏夫（ジャーナリスト・作家）

日 時：1999年2月1日（14：50—17：20）

場 所：H-170

日本の刑務所には、4万5千人の受刑者と1万人の未決者（1日平均収容人員）が収容されている。

被収容者の90%は日本人で、他の10%が在日外国人と来日外国人である。来日外国人はおよそ2千人、国籍は五十数か国に及んでいる。刑務所内の公用語は日本語、英語、中国語であり、日常生活に不自由がない程度にコミュニケーションが可能な者は30%程である。

ところで、日本の刑務所はすべて高い塀によって社会と隔絶した特殊なコミュニティである。そこでは、集団を管理するために、画一的なスタイルが囚人に強制される。指示命令という刑務所側からの一方的な意思の伝達が全てに優先されているのである。

欧米の刑務所が犯罪者の態様によって拘禁度に差異を設け、自主自立の精神を涵養し、人間の本来的な欲求であるコミュニケーションを努めて奪わないようにしているのに比べると大きな違いがある。

日本の刑務所に収容されている外国人は、二重のギャップに苦しんでいることになる。日本と欧米の囚人に対する処遇は、ひとえに歴史と民族性に根差した文化の違いを見せている。中央集権的な抑圧された統治の歴史は、権力的であり非個人的である。

日本の刑務所は、囚人から全てのものを奪っている。行動の自由、友人、家族、セックス、経済活動……。一方欧米の刑務所は、必要最小限の自由のみを奪うよう努力している姿がある。家族との交流（面会・電話）はほとんど制限

はなく、セックスの機会も設けている。

少なくとも刑務所においては、コミュニケーションを保障する程度がその国の“人権意識”を計る尺度になっているようだ。